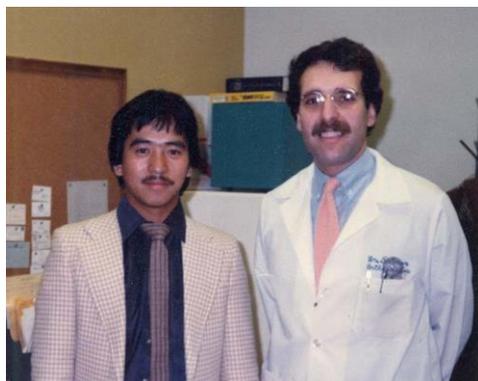


恩師 Dr. Clayton A. Peimer と Mrs. Susan Peimer のクリニック訪問



11月5日の訪問時、4人目のFellowの市岡医師



約37年前に出会った頃のPeimer先生



出会いからこれまでの経緯をスライドで話す



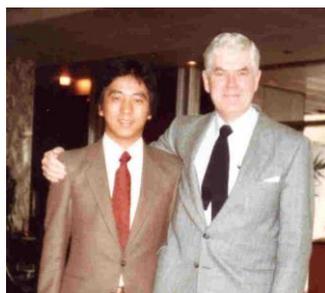
南川夫妻が2学期のニューヨーク州立大学の英語学校終了後に1年間ボランティアで通った Erie County Medical Center



たくさんの日本人の友人ができた。



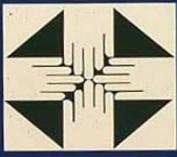
ボランティアオフィスのチーフと秘書、毎日出勤時に4.75ドルのミールチケットを受け取り、夕方まで過ごす。英語学校と異なったたくさんの出会いと経験ができました。



2年足らずで帰国すると、関西医大の整形外科の主催する日本整形外科学会の総会に向けて海外からの招待者の準備に追われたが、同級生の応援もあり、臨床の遅れは少しずつ取り戻せた。1986年東京で開催された国際手の外科学会で、Peimer先生との再会。BuffaloでHand centerを開設するので、研究者として渡米しないかとの提案がありました。

当時の小川教授の許可が得られ、京都のPost congress学会で自宅に招待、翌年からの渡米の話がとんとん拍子に進む。(1986年11月)

HAND CENTER
OF WESTERN NEW YORK



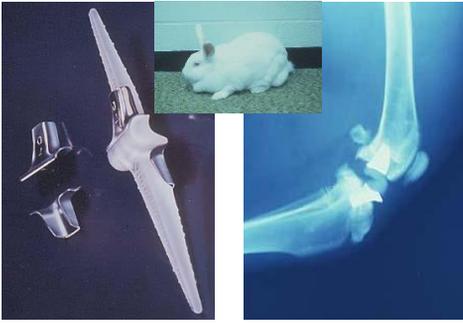
翌年1987年7月には家族で渡米しました。Hand center of Western New YorkはBuffalo市内にありましたが、研究室は前回通いなれた、ECMCの敷地内にありました。



ナイアガラの滝まで車で約45分の距離です。



郊外の静かな一軒家を賃貸しました、広い芝生のある敷地は隣の垣根がなく約800坪の広さです。



初めてのResearch fellow(研究員)だったので、準備が整うまでの間、当時は緊急手術なども手伝う経験ができました。あっという間に2年半が経過して、卒業式。ゆっくりと次の波多野医師の家族に引継ぎを済まして、私たち家族はMayo Clinicのあるミネソタへ引っ越しました。



基本的には、2年交代で研究員は5人が引継ぎ、研究と家族でのアメリカ生活を満喫できました。



Fellowの助手として、大学から、研修医の期間中に6か月交代で、英語研修と研究の手伝いとしてアメリカ生活を体験するシステムを導入、合計15人位Peimer先生のお世話になりました。



1998年国際手外科学会、バンクーバーでPeimer先生の親友Dr. Cooney(私のMayo clinicへの紹介者)を囲んだ当時のBuffaloに居た関西医大のFellow達。

2010年国際手外科学会、ソウルにて、BuffaloのFellowだった韓国のDr. Choi(右端)ロシアのDr. Zolotov,有島先生(左端)。

2000年小川教授の退官記念行事で来日、関西医大の手の外科チームとの写真。

Dr. Peimerは、現在Boston郊外のRoad islandでの臨床から離れて研究の仕事を継続されています。また、どこかの学会でお会いできること、大阪万博にも来ていただければと思っています。